

自立活動における実態把握、指導方法、評価に関する研究

平戸哲郎

1. はじめに

自立活動は、個々の児童生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服する教育活動であり、そのためには、個々の児童生徒の実態に即して指導内容・方法を工夫し、障害に基づく種々の困難の改善・克服を図る指導を行うことが基本である。

知的障害のある児童生徒には、知的発達のレベルからみて、言語、運動、情緒・行動などの面で、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態が知的障害に随伴して見られる。このような児童生徒には、知的発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態についての特別な指導が必要であり、これを自立活動で指導すると言うことができる。

2. 研究主題設定の理由

ところで、自立活動の重要性は認識されてはいるものの、知的障害のある児童生徒の指導についてはまだまだ模索段階であるように思われる。

自立活動の指導内容として22項目設定され、健康の保持、心理的な安定、環境の把握、身体の動き、コミュニケーションの5つに区分されているが、知的障害のある児童生徒の指導にあたってはどこに焦点を絞ればよいのか分かりにくい。前述の指導内容はいずれも一貫性が求められるものばかりであるが、教師が替わることによって指導内容が変わるケースも珍しくはないのではないだろうか。

また、保護者に自立活動の指導について説明する必要があると言われているものの、実態把握で児童生徒のマイナス面に触れる等するため十分な説明がなされていないのが実態ではないだろうか。

そこで、研究主題として「自立活動における実態把握、指導方法、評価に関する研究」を設定し研究を進めることとした。

3. 研究の目的

本校高等部生徒U男を対象として取り上げるが事例研究ではない。その取り組みをとおして以下の点について研究することを目的とする。

- 自立活動の指導のための適切な実態把握、目標設定、手立て、そして評価のあり方はどのようなものか
- 保護者に自立活動の指導について説明できるようにするためには、いかなる手続きを取ればよいのか

4. 自立活動における実態把握、指導方法、評価の手順

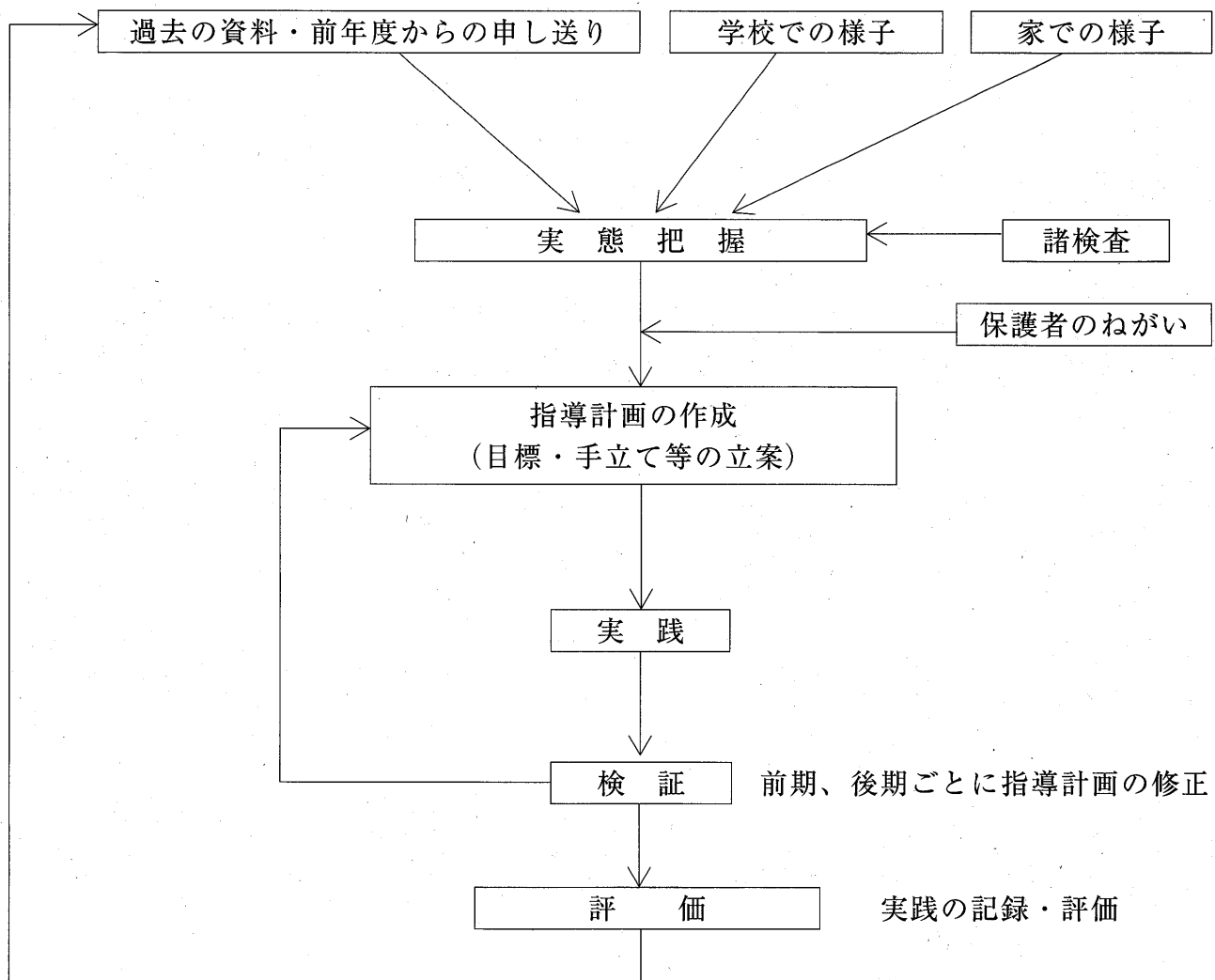


図 実態把握、指導方法、評価の手順

(1) 実態把握

①過去の資料・前年度からの申し送り

- ・ 個別の指導計画、指導要録、個別ファイル等に目を通し、幅広く情報を集める。
- ・ 不明な点については、前任者に聞く。

②学校での様子

- ・ 付箋紙を活用する等して複数の教師の目を通して、全体像を把握する。(資料)
- ・ 毎日の活動の記録をとる。

③家での様子

- ・ 自立活動に関するアンケートを実施し、家での様子を知る。
- ・ 実施したアンケートをもとに個別面談を行い、家での様子をこまかに知る。

④諸検査

諸検査を実施することで、日常生活の観察では見えてこない部分が明らかになることがある。是非とも何らかの検査を実施したいものである。

ところで、諸検査を実施するにあたり以下の点に留意したい。

- ・本人、あるいは保護者に検査実施の了解を取る。
- ・知りたい事柄を明確にし、実施する検査を選択する。
- ・いくつかの検査を組み合わせる。
- ・検査の種類によっては、専門家に依頼する。

(2) 指導計画の作成

①目標の設定

- ・実態をもとに目標を設定するが、視点を絞り具体的なものとし評価がしやすいようにする。
- ・目標はあくまで教師が設定するものではある。しかし保護者の願いを尊重することが大切である。保護者と相談しながら目標を設定したり、教師が設定した目標を保護者に提示し修正を加えたりする必要がある。

②手立ての立案

- ・学校の教育活動全体を通じた指導、時間における指導の関連を重視する。時間における指導を担当以外の教師が実施する場合には、担任との綿密な連絡、連携が必須である。
- ・学校の教育活動全体を通じた指導においては、特定の手立てに固執しない。

③評価

- ・実態把握のための方法に近いものを可能な限り実施した上で評価する。
- ・あくまでも、設定した目標について評価する。

5. まとめ

本校高等部生徒U男を事例とし実践的な取り組みをすすめてきたが、本研究で掲げた目的について簡潔にまとめたい。

- 自立活動の指導のための適切な実態把握、目標設定、手立て、そして評価のあり方はどのようなものか。

付箋紙の活用により複数の目を通して全体像を把握することで、教師個人の思い込みに陥ることなく目標を設定できたと思う。目標達成のための様々な手立てを講じていき、評価においてはあくまでも設定した目標について評価したい。

- 保護者に自立活動の指導について説明できるようにするためには、いかなる手続きを取ればよいのか。

学校だけで児童生徒の実態把握をしそれを保護者に伝えようと、教師、保護者の関係を悪くしてしまう可能性がある。児童生徒の実態把握の段階から、保護者におおいに参加してもらう。学校・家庭両面からの実態把握が、保護者に自立活動の指導について説明できやすくなることにつながるものと考えている。

<参考文献>

- 1) 大井学・大井佳子(2004) 子どもと話す：心が出会う INREAL の会話支援
- 2) 小林重雄・山本淳一・加藤哲文(1997) 応用行動分析学入門
- 3) 上岡一世(1997) 精神遅滞児の就労に必要な能力に関する研究：職場、教師、親の意識の比較を通して．特殊教育学研究．34(4)，55－62
- 4) 大野清志・村田茂(1993) 動作法ハンドブック：初心者のための技法入門

付箋紙を活用した児童生徒の実態把握

1 目 的

- (1) 児童生徒一人一人の全体像を把握する。
- (2) 児童生徒一人一人の様子を複数の教師で付箋紙に書きこむことにより、教師個人の思いこみを避ける。

2 方 法

(1) 付箋紙に記入

- ① 児童生徒について、複数の教師が付箋紙に記入する。
- ② 「音楽の時間に、楽しそうにカスタネットをたたいている。」よりも、「音楽の時間に、笑顔でカスタネットをたたいている。」のほうが良い。というのは、「楽しそうに」というのは教師個人が感じたことである。感じたことではなく、事実を記入するよう心がける。
- ③ 分かりにくい点があった場合には確認する必要があるため、付箋紙の右下に教師名を書く。
- ④ 書かれたものを後でいくつかのカテゴリーに分類するため、一枚の付箋紙にはなるべく一つの事柄だけを記入する。
- ⑤ 年齢や教職経験など教師個人の属性に関係なく、情報を提供し合うという自由な雰囲気づくりが大切である。対象となる児童生徒の担当者は、情報を提供してもらうという姿勢でのぞむのが好ましい。

音楽の時間に、笑顔でカスタネットをたたいている。

教師名

図1 付箋紙記入例

(2) 付箋紙の分類

- ① 付箋紙を、場面あるいは行動などのカテゴリー（〇〇）に分類し紙に貼りつける。
- ② 分かりにくい点がある場合には、確認のため記入した教師に聞く。

〇 〇		〇 〇	〇 〇	
付箋紙				

図2 付箋紙の分類